人文科学研究所翻訳叢書

2.『ヘブリディーズ諸島旅日記』(ジェイムズ・ボズウェル)

2010年3月6日発行

中央大学人文科学研究所 編 中央大学出版部発行

本体価格4,000円（税別）

ISBN 978-4-8057-5401-6

訳：「S. ジョンソン研究」チーム

（諏訪部　仁研究員、市川　泰男研究員、江藤　秀一客員研究員、芝垣　茂客員研究員、
稲村　善二客員研究員、福島　治客員研究員）

目次は次ページ以降をご確認ください。

目　次

エドモンド・マローン氏への献辞
第三版への序言
前書き　ジョンソン博士の人となり。博士のスコットランド到着。
八月十五日　サー・W・フォーブズ。法の慣行。移民。ビーティー博士とヒューム氏。ロバートソン博士。バーク氏の多様にして異常なる才能。能力に関する疑問。ホィットフィールドとウェズレー。政党への意見。悲劇役者としてのギャリックに対するジョンソン博士の意見。　16
八月十六日　オグデンの『祈り』。格言的著作。エジンバラ見物。スウィフトの作品の特徴。悪霊と魔法。モンボドー卿とオランウータン。　27
八月十七日　詩と辞書編纂。懐疑論。永遠なる必然への論駁。ヘイルズ卿の『人間の望みの空しさ』への批判。マクローリン氏。著作権に対するスコットランドの判事たちの判決。　36
八月十八日　ヘブリディーズ諸島への旅立ち。著者の自己紹介。グラスゴーの商業。自殺。インチ・

キース島。国会の知識。貴族の影響力。大衆の騒動。セント・アンドルーズ到着。　41

八月十九日　ワトソン博士。文学とパトロン制。著述と会話の比較。風習の変化。両国合同。金銭の価値。セント・アンドルーズとジョン・ノックス。世間からの引退。教授たちとの食事。悲哀と満足に関する疑問。作文法への意見。ジョンソン博士の方法。記憶の頼りなさ。　49

八月二十日　祈りの効果。日曜日の遵守。ショー教授。化体説。著作権。ジョンソン博士に関するタイヤーズ氏の発言。モントローズ到着。　60

八月二十一日　樹木の欠如。ローレンス・カーク。モンボドーでの食事。移民。ホメロス。伝記と歴史の比較。学問の衰退。その諸原因。主教への昇進。ウォーバートン。ラウス。丁重さの価値。モンボドー卿に対するジョンソン博士の感情。アバディーン到着。　66

八月二十二日　トマス・ゴードン教授。公的教育と私的教育。サー・アレクサンダー・ゴードン。アバディーンの商業。スコットランドにおける殺人の時効。三位一体の神秘。キリストの贖罪。旧い友情の大切さ。　79

八月二十三日　ジョンソン博士アバディーンの名誉市民となる。サー・アレクサンダー・ゴードン宅での食事。ウォーバートンの毒舌の威力。彼の『恩寵の教義』。ロックの詩。フィンガル。　87

八月二十四日　ゴールドスミスとグレアム。スレーンズ城。子供の教育。ブラー・オブ・バカン。限嗣相続。貴族の重要性。サー・ジョシュア・レノルズ。エロル伯爵。　91

八月二十五日　親類と良好な関係を持つ利点。インド帰りの大金持ち。従属の封建制。ストリッケンでの食事。田舎紳士の生活。文学クラブ。　100
八月二十六日　モンボドー卿。財産の効用と重要性。エルギン。マクベスの荒野。フォレス。　105
八月二十七日　レオニダス。ポール・ホワイトヘッド。デリック。原罪の起源。コーダーの牧師館。教理の受諾の正当性。家族の礼拝。　111
八月二十八日　フォート・ジョージ。サー・アドルファス・オートン。ウォーバートンとラウスの争い。サー・アイア・クート宅での食事。アラブと英国の兵士の比較。演劇。ギャリック氏、シバー夫人、プリチャード夫人、クライブ夫人。インバネス。　117
八月二十九日　マクベスの城。旅行記の著者たちの不正確さ。造語。ジョンソン博士の辞書。　125
八月三十日　馬に乗るジョンソン博士。ハイランドの小屋。フォート・オーガスタス。トラポード司令官。　128
八月三十一日　アノッホ。移民。ゴールドスミス。詩人と兵士の比較。水夫の生活。アノッホの宿の主人の娘。　133
九月一日　グレンシール。マックラー族。筆者によって荒野にしばらく放っておかれたことへのジョンソン博士の怒り。グレネルグのお粗末な宿。　139
九月二日　ジョンソン博士が怒りをおさめる。スカイ島。アーミデル。　147

九月三日　モンゴメリー大佐、現エグリントン伯爵。　150
九月四日　かつてのハイランドへの熱狂。　151
九月五日　サー・ジェイムズ・マクドナルドの墓碑銘と母への最後の手紙。ジョンソン博士のスカイ島へのラテン語の頌詩。アイザック・ホーキンズ・ブラウン。　152
九月六日　コリハタハン。ハイランド的歓待と陽気さ。ジョンソン博士のスレイル夫人へのラテン語の頌詩。　160
九月七日　天候次第という不安な状態。田舎に住む人々の状態。マクファーソン博士の『スコットランドの古代遺物論』。第二の視覚。　162
九月八日　尊師ドナルド・マクイーン氏。マルコム・マクラウド氏。ラーセイ島への出航。フィンガル。ホメロス。ラーセイの優雅で陽気なもてなし。　165
九月九日　ラーセイの一族の古さ。不信心を直す方法。　173
九月十日　ラーセイ島の調査。ベントリー。マレット。フック。マルバラー伯爵夫人。　175
九月十一日　相続される司法権。島の生活。マクラウド領主。　184
九月十二日　ポートリーへの出航。ジョンソン博士死を語る。エリバンク卿のジョンソン博士と筆者への手紙。ジョンソン博士の返事。馬でキングズバラへ。フローラ・マクドナルド。　187
九月十三日　ジェイムズ二世の孫の苦難と逃走。ダンベガン到着。　196

九月十四日　女性の貞節の重要性。カダガン博士。著者の自説を補強するのに当人の実践が必要であるか否か。機嫌のよさは習得可能。　224
九月十五日　サー・ジョージ・マッケンジー。バーク氏の機智、知識そして雄弁。　228
九月十六日　ジョンソン博士の遺伝的な憂鬱症。様々な技術に対する博士の詳細な知識。筆者の熱心な追及に対する弁明。ジョンソン博士の想像上のハーレム。一夫多妻制。　231
九月十七日　狡猾。邪悪であるにはかなりの才能が必要であるか。女神アナイティスの神殿。家族の肖像画。昔のイングランドの歴史家が記録を参照しなかったこと。ペナント氏の旅行記への批判。　236
九月十八日　ハイランドの族長の昔の住居。国民の系図としての言語。マック島の領主。　242
九月十九日　妻の選択。女性は男性よりも上手（うわて）である。セント・キルダ島のレディー・グレンジ。野蛮人の詩。フランスの文学者。ボクシングの懸賞試合。フランスとイングランドの兵士。決闘。　247
九月二十日　ロンドンの風習の変化。怠惰への非難。土地所有と商業の利益の比較。感謝考。　252
九月二十一日　ダンベガンの描写。ロバット卿のピラミッド。馬でウリニッシへ。フィプスの北極への航海。　255
九月二十二日　ウリニッシの地下の家と大洞穴。スウィフトのオレリー卿。友人によって書かれたも

のであっても美点同様欠点も伝記の正当な題材である。手紙の凝った結び。臨終を迎えるまで怒りを保持することは許されるか。文学者の伝記執筆への意見。フィンガルの信憑性が否定され嘲笑される。 259

九月二十三日 フィンガルに関するさらなる考察。著名人でも不慣れな形で公の場に出ると狼狽する。ギャリック。モンターギュウ夫人のシェイクスピア論。有名人はロンドンで監視されている。一五五〇年から一六五〇年までのスコットランド人の学識。両国合同までスコットランドでは文化的生活がほとんど知られていなかった。水夫の生活。造船所で働いたピョートル大帝の愚かさ。タリスカー到着。長老派教会牧師の学識不足。 266

九月二十四日 フランス人の狩猟。ヤング・コル。バーチ博士。パーシー博士。ヘイルズ卿。歴史書の公平さ。牧師にホイッグ主義は似合わない。 278

九月二十五日 すべての島は牢獄。スカイ島の小屋。コリハタハン再訪。強い仲間意識が度を越す。 281

九月二十六日 昨夜の暴飲に対する翌朝の反省。老キングズバラのジャコバイトの歌。レディー・マーガレット・マクドナルドがスカイ島で崇拝されている。同じ事に対する違った時代の違った見方。自己欺瞞。 285

九月二十七日 ジョンソン博士のスカイ島における人気。博士のハイランド女性との上機嫌ないちゃ

つきぶり。 289
九月二十八日　昔のアイルランドの家系の誇り。ジョンソン博士、脱穀と屋根葺きを語る。労賃を上げるのは危険である。オスティグ到着。マクファーソン博士のラテン語の詩。 291
九月二十九日　尊師マクファーソン氏。シェンストン。ハモンド。サー・チャールズ・ハンベリー・ウィリアムズ。 298
九月三十日　バーク氏はどこでも第一人者。下院で頭角を現すには人並みの才能があればよい。ヤング博士。ドッドリッジ博士。ハノーヴァー家の即位以来の不信心な著作の増加。ジョンソン博士の変化する印象。我々の勉強の跡が詳細に記録されるべきである。 301
十月一日　ジョンソン博士は彼の辞書にあるすべての単語を知っているわけではない。著者への攻撃は著者自身にとって有益である。アーミデル再訪。 305
十月二日　ウェールズの名家の古い仕来り。ドイツの宮廷。ゴールドスミスの話し好き。移民。セント・キルダ島民の奇妙な話。 308
十月三日　エピクトーテスの死出の航海。マル島への出航。嵐。風に流されコル島へ。 312
十月四日　ジョンソン博士のテンプルでの生活ぶり。博士の奇妙な乗馬姿。船酔いとは。バーネットの『現代史』。献辞と歴史書の食い違い。 319
十月五日　どんなことでも口に出していればいつかは実現する。尊師ヘクター・マクリーン氏。ベー

ル。ライプニッツとクラーク。コル島概観。島の生活。ブレカッハ到着。ジョンソン博士の嘲りの威力。 321

十月六日　相続される司法権。小屋の中の幸せに関する哲学者たちの意見の考察。領主への忠告。 329

十月七日　書物は幽閉状態における最良の慰め。 332

十月八日　ジョンソン博士のにせの兄弟。愚かしい行為に自分の名前が使われても打つ手なし。レディー・シドニー・ボークレア。カートの『オーモンド公爵伝』。ヤング・コルの小箱。偉大なモントローズの手紙。コル島の現状。 333

十月九日　ジョンソン博士の様々な本への貪欲さ。ハイランドの口碑の信じ難さ。ジョンソン博士の感情の細やかさ。 341

十月十日　借地人の領主への依存。 344

十月十一日　ロンドンと北京の比較。前者に対するジョンソン博士の高い評価。 345

十月十二日　マクスウィーン氏宅に戻る。宗教に関すること以外の迷信。粗野な振舞いへのジョンソン博士の嫌悪感。博士の奇妙な習慣。 346

十月十三日　せわしなく動くことが必ずしも急ぐことにはならない。「からす麦」はスコットランド人だけの食物ではない。 349

十月十四日　マル島到着。アディソンの『イタリアの印象』。アディソンはイタリア文学にあまり精通していない。フランス人は文学を取り入れる技に長けている。彼らの『記録集』。ラシーヌ。コルネール。モリエール。フェネロン。ヴォルテール。ボッシュエ。マシロン。ブールダール。ヴァージルの地獄の入口の描写を印刷所になぞらえる。　350

十月十五日　アース語の詩。音楽を知る危うさ。常に死に備えて事を処理する適正さ。若い人々に宗教と文学的達成を厳しいものだと言いすぎてはいけない。我々の行く先々での歓迎ぶり。　357

十月十六日　マクリーン嬢。マル島の記述。ヘブリディーズにおけるオークの杖の価値。アルバ島のマカーリー氏宅への到着。マクラウド大尉。第二の視覚。婚姻料と「イングランド区」。エクイティ裁判所で地所の売買が無効にされる理由。　362

十月十七日　インチケネス島到着。サー・アラン・マクリーンと娘たち。日曜日には宗教書以外は読むべからず。キャンベル博士。ハイランダー姿のジョンソン博士。飲酒考。ジョンソン博士のインチケネス島に関するラテン語詩。　368

十月十八日　ヤング・コルの種々の美点。商業での成功には並外れた才能は不要である。ソランダー博士。バーク氏。ジョンソン博士の豪胆と沈着。コル島とタヒチ島の奇妙な風習。ヤング・コルへのさらなる賛辞。フランス人は外国で騙(だま)されやすい。　374

十月十九日　ヤング・コルの死。ジョンソン博士は確証がなければ容易には信じない。「不信心者の

信じやすさ」。マル島の沿岸。尼僧島。過去の情景が回想では楽しくなる。イーコルムキム島上陸。 378

十月二十日　イーコルムキル島の遺跡の概要。厳粛な敬神の場の影響力。この上ない封建制の権威。マル島に戻る。 383

十月二十一日　パルトニー。ピット。ウォルポール。ウィルクス氏。イングランドとユダヤの歴史の比較。スコットランドは石と水とわずかの土からできている。『トルコのスパイ』。ロッホブイへのわびしい移動。領主の描写。 387

十月二十二日　ジョンソン博士に異様な朝食が提案され拒否される。ロッホブイの戦闘用の鞍。オーバンへの航行。 391

十月二十三日　ゴールドスミスの『旅人』。ポープとカウリーの比較。アーチボルド・アーガイル公爵。インヴェラリー到着。ジョンソン博士ウイスキーを少し飲み、その理由を語る。筆者からギャリック氏への手紙。ギャリック氏の返事。 394

十月二十四日　オグデンの『祈り』の適例。ハーヴェイの『瞑想』。ジョンソン博士の「プリンに寄せる瞑想」。田舎の隣人。筆者のインヴェラリー城訪問。エアシャーの貴族たちの影響力への邪まな抵抗。 402

十月二十五日　ジョンソン博士アーガイル公爵に紹介さる。閣下の館の壮麗さ。筆者気まずい情況で

平静を保つ。「宙ぶらりん」のアーチボルド・キャンベル閣下。老タウンゼンド卿。贅沢に関する問題。性格のよさの証拠。よき信条と悪しき実践。 408
十月二十六日　ヒュームの『ダグラス』の一節とユーベナルの一節の比較。スコットランドにおける礼拝所の放置。サー・ジェイムズ・コクーン宅への到着。 414
十月二十七日　ジョンソン博士のアーガイル公爵への手紙。閣下の返書。ローモンド湖。ジョンソン博士の服装観。礼拝の形式の考察。スモレット氏宅への到着。 418
十月二十八日　スモレットの碑文。ジョンソン博士の驚異的な記憶力。旅行中の博士の敏活さ。グラスゴー到着。 422
十月二十九日　グラスゴー見物。教授たちのジョンソン博士への慇懃さ。 424
十月三十日　ルードゥン伯爵邸での食事。同伯爵の性格。トリーズバンク到着。 427
十月三十一日　キャプリントンのサー・ジョン・カニンガム。 428
十一月一日　慈善の施し方。ダンドナルド城。エグリントン伯爵夫人。アレクサンダー・エグリントン伯爵。 429
十一月二日　アフレック到着。アフレック卿の性格。彼のジョンソン博士観。 431
十一月三日　ジョンソン博士のハイランドに対する感情。ソールズベリーのハリス氏。 434
十一月四日　アフレック。角のない牛。心の平静はどこまで達成できるか。 435

十一月五日　ジョンソン博士のイングランドの聖職者に対する深い敬意。　438

十一月六日　アフレック卿とジョンソン博士の衝突。　439

十一月七日　ジョンソン博士の不変の敬神。博士の長老派の礼拝への嫌悪感。　441

十一月八日　ハミルトン到着。　441

十一月九日　ハミルトン公爵の館。エジンバラ到着。　442

十一月十日　エリバンク卿。政治的信条の違いは対立によって増大する。エジンバラ城。フィンガル。イングランド人の軽信ぶりはスコットランド人に劣らず。第二の視覚。友人としてのギャリックとフットの比較。モラビア人の伝道団とメソジスト。　442

十一月十一日　歴史は元来口承である。ロバートソン博士の心の広さ。反抗は人間にとって生来のもの。　450

十一月十二日以後　十一月十二日から十一月二十一日までのジョンソン博士の行動の要約。マンスフィールド卿。リチャードソン氏。イングランドの判事の私生活。ロバートソン博士とブレア博士に対するジョンソン博士の高い評価。ブレア博士から筆者への手紙。将校たちはしばしば自分の職務にかかわることに無知である。聾唖学校。スコットランドの高地人とイングランドの水夫。著作者への攻撃は彼らを利する。ロスリン城とホーソンデン。サー・ジョン・ダルリンプル

の回顧録のジョンソン博士のパロディー。クランストン到着。ジョンソン博士のロンドンへの出発。ヘイルズ卿とデムスター氏の筆者への手紙。ラーセイ島の領主の筆者への手紙。筆者の返事。ジョンソン博士の『西方諸島の旅』における間違いを認める広告。博士のラーセイ島領主への手紙。サー・ウィリアム・フォーブズの筆者への手紙。結語。　452

訳者あとがき

索　引